菊能美移

三

曹 5
118
3

陸軍印
曽5イ門
118
3

南山嶺遺稿巻之三

秋齋桂先生著

門人
細谷文卿校

(哭)かしがとりつる。山のもなどくちく。諸山は勝れ高き
そびるとをつる。山のうしろ(ヒ)ひとつ見ゆる白雲(シラクモ)ぞ。むも。
絶頂(ビツテウ)まあるとつ雲ぞ。甲州(カフシウ)いとるどく高(タカ)きこと。多(ヨ)
き級(ユキ)かしの間くいつりとぞ。或(ヒト)人の作らまし。またきて。
らくおとつを俗語(ゾク)は甲斐(カヒ)く変とつ詞をぞ又うし
かきとつ付る。甲斐(カヒ)くきいぞとて其功(コウ)の見ぐる紙
山の高(タカ)くみるは雄(ナガ)らく甲斐ちきい功(コウ)もちきく

いふ人もあるべし。拙が家の南といつぱ甲斐産の人にて
此人の話より甲斐の國い諸ゑよ膳まく本の實のつき國
ちりといふ斐の字このみとりなを也。支故斐小かり
らとりつかまく。甲斐の國く呉。甲らぱい第一らぱ乃
公ちりとそ。むく斐仲をとりつものあり支。字沿指遠
よんくらとそんく。斐たる居ゑあり詩弦あるも
其實實ある居ゑく。論語ゑ斐然成章をも其実伐傷
へく。ゑるとも文章を成ちりとなるぱ。公のひとりも
公公浮ゑくよむへきう

(四十九) 或公てのりく市宮のあるしき。遠方ゑ

しより試ゑく。和樣とゑ銘酒をゑし拾ゑ。真ゑ大く
ゑくのませゑ公其時市宮
おさゑる試ゑ公ゑとゑよ和樣のくあるは去ゑあ公ぱ
かゑるる任ゑ。古風ゑ古人ゑ集ゑ去とゑ支とこの
めも去と讀し例ゑ拾ゑ。ゑ拾ひとんゑう返欲
いゑ拾ゑ去ゑ支の比ちあるいくおちゑの去ゑあるん
尚ゑの任ゑとゑめくい。風ゑ遠ひゑちりしく讀ゑし
くぱゑものくゑ。ゑりくの祈を拾く公得ゑ。公風の
欲しゑあゑ。公浮ゑもゑるべきゑのゑ。或公て作ゑあゑく

(五十) 唐ゑゑ芝居あゑ。戯場ゑく去色堂ゑいふ。

皆芝居のもの。隱元禪師の世界を。大戯場とはいふべらるるも。人間の生く所。芝居の字別るるものなり。漢書に亞優といひしものあり。能おもしろきを故芝を芸人娘しるるあり。芝居役者を優しいふ。其比亞優といふ。日本にいふ座敷のものあり。日本の立役の類を比丘といふ。漢の代より發りしを依く芝居役者紙子羽織を。若女方の類を。薫脂郎と云。薫脂いはゆる紅おしろい男まで紅おしろい故。賣若衆を寄童といふ。明朝の芝居をいふ。戯場東棚をとうんくもとあり。また持参の事わく

来さぶきしいふ意也

(五十一) 賀の字を詠変。ゆるく強く讀をし。

面白くようほんとうたくさんを祈をもくく讀もたを故實まあるべし。或人の作まし。そもあるくようき人の讀のいは賀のうをとんるふいづまもたくをおくたくくく讀くもの也

(五十二) 打鮑い熨斗ゆく。鮑うをきい不吉。あるひとうふたを婚禮まひどを。ぎらく。ぎらあるひを切くの熨斗のもく革ていはもをめしいはく。拂子中の中道具も用ひがぶ。

(三十三) 帛風炉を一しきといふ。源氏東屋よあり。雀形と
ふるのいと翼の鳥をといふ。相思ふ夏のふるまを
ゆるとふ

(三十四) 七の数い易くい和の成数なる故数なり。尝と
ても用ふ。七い福数。仏家にも七面なるを七
を用ふるを七い大己貴の数。八つい素尊の数なり。
ゆるき有り

(三十五) 浴衣を表とする夏。田舎人などが紙なるを用
ふ。なるべくのべ。老古風。むかしい皆晴の
時い大御ゆるものとなる。禁中歩行るるは衣のうへ

よ大御をなるべくひきなしにする。むかしを
ゆるすべるものいを衣をなるなり。又衣をなして
其上よ道の間を布をきる也。常花和泉なるべし。
曾我物がたりなる。虎が和泉ゆるる。
なるべし

(三十六) 七夕の夜の詞い殿にとゆる草紙なるあるなり
清少納言枕草子。和歌を鵲まなる。殿なる
云云。庫の鎖を建て後。庭に新殿へなるを
なる。其殿なる今宵い年の夜なり。いざとあやし
なんなるなるなる

ふるのみや日本の笛やして

うゝふるゝ云云是新殿へうける年のおくりよ稱く賞る詞く貴くも富る麦くる日本第一の家とそこあれしいみるく今語く若菜とゝやたゝき唐土の名とゝよゝ此麦ちゝ

(卅七) 豕のうちちゝるき事く源氏物語ふるのまあり。麦子のゝ也源氏よこゝうしたんつゝと古来麦子の餅出ゝ所くゝゝゝ

(六十) 枚とゝの詞合とゝふ詞の変。廷あるものハ一器とゝふ布ものも紙ものも張バ。一張とゝふ。蓋あるものハ一合とゝふ。中へ物の入らぬものハ一枚とゝふ。たゞ刀身ハ一枚とあり

(六十一) 黒塗燈籠ハ貞観式を考るに。喪中ハ黒塗の燈籠をもちゆ。佛事ハ張る事と見ゆ

(六十二) 物忘の札ハ。大切の神変ありしとき赤紙を小さく切て齋と書て側に立てふ人の髪ハ其者を書て。古風也。古事を推の本の皮を去て。これハ手付く髪を付ゝる。今ハ紙をもてこれを髪系なぞの類使ひ

家来紙をもて也。玉海ハ齋の変。水くゝれ。佛法ハ
ものゝ小出ものゝ。ものゝ。ものゝ。神代の故事とゝ
(六十三) 市所とゝふ限りの変。三宝院門府記ハ。攝家を
ふゝぎゝ。支ゝ下ハ市取とハいとゝ。ゆ下とゝふ詞ハ凡て
其地区の堂上方をゝふ
(六十四) 扇を的とゝ。変類聚国史ハ仁明天皇の勅。野
右海左手ゝ。的ハ。的ハ。扇を用ゝ。其ハ扇を用ゝ
おゝ。ゝ。ゝ。

十字とゝ云ふ也。所蒸餅のゆゑ。蒙求よ十字なるをい
不食とゝく能ゝ十文字よ破ゝ級ゝ。市室守覚
法親王日記よゝく親切の奥よ出十字ハ出ゝ。
蒸物の閑ゝのゆゑ

(六十六) 生花の変ゝく貴人招請ゝ時ゝ。生花ゝべゝ。
駄ゝとゝ云ふく。客よ生ゝ変ゝ真生ゝ生ゝ。ゝくの
ゝをゝく調ゝゝく客よ生ゝ変ゝゆゑく。逍遥院殿の
記よ見ゝゝ

(六十七) 太子傳の中よ王右軍ゝ字ゝ書ゝ王右
軍ゝ王羲之ゝゆゑく。ゝゝ類聚ゝ実ゝ書ゝゆゑよ。文武天皇

の時よゝ太子の時よゝゝゝ。ゝ垂仁天皇の後胤ゝ石
車ゝゝ変ゝ。ゝ字の謬ゝ。ゝ石車ゝ草書ゝ誤ゝ也。
又太子の諡の事。今義解よ聖徳皇とゝ。親鸞聖人和
讃よ聖徳皇の表ゝ文あり。ゝ古来親鸞上人
ばゝゝ聖徳皇ゝゝゝ園大暦ゝ考ゝゝゝゝ
先太子ゝ云ゝ。ゝの仏像ゝ安置ゝゝゝ。
太子傳ゝ。法隆寺傳ゝ構ゝ傳天王寺傳ゝゝ太子傳
よ二ケの秘事ゝケの傳ゝゝ。今二巻の平氏
傳ゝゝ偽名の十巻の太子傳ゝ。ゝ平氏傳ゝ和
ゝ十巻ゝゝ。平氏ゝ平基親ゝ。基親

い官職秘抄の作有也。又一向宗の善導贊も作
り。基親の父は民部卿親範。母は高階氏の娘なり。
芹橋后母方は大切の傳あらはれたり。左子傳をたくさん
今板行の左子平氏傳本文太遠ひと。又速成院の
本なり。是は六条の左子堂のすく。扨又左子傳は三ケの傳
又ケ論ナケ難しとなる。けぎをはあはい讀たくさんぬ
ものく。左子はいと論宗へ。左子の出車は漢邦の書なも
あり。二十一史の家史を考へ。爰中小法華経を唐
土へうつ紙ふるは六齋日のすは左子七方のさき
立らまて夏延喜式はあり

(六八) 神社にある湯立とゆふ夏代は無の茅と蒼朱と
をもつく湯をあるくしプケとゆふは蒼朱のすく記宣
はは神徳を人は告たしむる事。唐そは大切の神
なとまたるを紀今湯を用ひ。今湯とは湯と水とを
紙かぎんの湯を清浄へ

(六九) 神夏は灸を忘や不忘やの夏は。吉田大納言定房
の吉記又月輪殿下兼實公の玉葉なもと。服服裏例
抄とは書へ。吉門家安陪泰親の記へ。神夏小芝
を忘むは陰陽家の説へ。上代ろく芝をいまぐ。むし
いまぐるは海式吉記など考へ見るべし。後世芝と

いまだ世俗深秘なり。神変は三日なり。是よりく
おこり不可眼目例なり。玉海とは水晶板
の変陰陽師の説。火剋金の少とも変り秋なる
時少火剋金といふも。陰會の説こ

(三十) 神変札は神なる僧尼重軽服不可有来入也。
攝家方は不可来。其露は親長々記は古来も
也の字など中古より也の字なしと也の字なかるべ
き歟。也の字あれど上の神なくの二字なくこ
なるべし和ぐる也。也の字下あれば上の神変神
なるべしと云ふ用ふ侍ふ者女声とは男声と

いふ業資王の和訓なり。梵語は地獄なり
つくしは地獄の罪人のすみかなり十王
猶は。俗名なり。きたなき想語なり

(三十一) 散米は棄捨の意也。仏家は仏へ奉は棄
捨なり。玉海は米は宝の如く神並へ奉は例
なし。已は尼くしく贖ものなり支敬の字も

(三十二) 神おの燈は稲荷は陽教なり。
神陽教は陽教を用ふべし。親長記也。
元神変は祝詞を作る文なし。燦火
あり。燈明は仏家の流入なるべし。江次第

西京記に夏根源年代の後の説と

(十三) 神夏は水をあふぎまくやの夏。神代檍原のこと水は入。是起原ばかりなれども実は沙へ出入ありしなる夏とていなるし。速も遅も悪しと中をとりて出をあくまあく。清浄あれ成みそれ。いざなぎ為作心を出ためあくしし所を左ひとおとりて誕くあくまるは伊弉諾あくまるは無名。和を改むるとうたをあくまあくめ。いくんたるは清まくまくし

(十四) 古来葬喪記といふは古に二巻あるなり。是天武天皇の時分出来たるなり。作者不知。見観式みに

ゆうり延喜式の中にあり。事へ葬喪記はみなりとあり四巻の中二巻なり。一と云ふ弥りあり。摂州住田社は和清のうへ。四礼雑記といふ元婚葬祭の儀式なり。是ある葬喪記生田社はあるもあるはゆうり門人松浦氏ふ一と中なり。別は一は駿河吉原は或人二巻形ある。其葬喪記は上代人名なく二年立て神はまたうる。一年なく天の乳代なる。二年つきて地の乳代なる。三年たきく人の乳代なる。然り清浄神は四たるもあり。神代巻下は天雅彦をなる少葬礼葬禮をなこと。ちきちと

いつくの土葬喪記よい寛後よりてき約約ときたを
考るよ上人い埋めたくい水葬とんてふ。土葬のぬい
槙をうんく棺をたくたる朱をとんくたるすい唐
流こ。たくい皆炭を以く粉みくたる綿をて
たる神代よ弾つくりとしてぷけるとしてその式
しら人墓をめ皆岩炭をもんくため彩石を立てく
立をきさたこ。梅松を植うこ。後年の石としてものを
立たい仏法ふうく唐流ふう雲主牌い明の世の神
主こ。さい上よ雲の形あり。葬儀式い先ふたれ
族をたくく。女ふたまてふたる男半孫のものを先へふたる男半

ふる。女ふ妻以次よ棺の槙井をたたる卅山棒を
并ふとこ。かるこの方をうふ仏法御く後のすこ。
妻腋よい四姪こ。位ふ旗下をねを。四年こ一年へ
父方の筋目。一年い母方ねを一尼一年い一生の約紀一年
、何の病ふて弱く何ふへ葬はとこるを書妻の
あしふい屬男ふへふたる一門こ寛後ふきおんる
をたくは。其次ぐふきこ。梅葬れ生たる四い不藏
とこふを日年流こ。生たる者のとく脳を供ふたる。
死人よ多ふふく其供ふものを喰をこのまこ云こ
(十五)神おふて咲を主をぐ〳〵ふる。中ム家の山槻

記よりて。神おそれ慎をぬぎ捨ゝすることあり
是故實に背くことを神拜して後ことわりの階
をくだはる。庭上にも七足八足論ずるしく
餐拜といふ。拜をすることなし。是仕業よろこと拜を
とゝく。唐土にても餐食拜をもて。神に陽を屬する作也
神に陽あり。鬼に陰を見るゝ。神を拜とはよこの
禮のつゝまる。皇拜官拜廣拜ともに。唐土にもかゝし
皇拜に江次第あり。ゆゑに神祇令の釈にあり。ちなみ
に禁祓とあるゝ。神も。要をさはる一天。是礼服
の作ゝ。廣拜に頭を垂へたるゝ。ぬんぎんに拜とは

こゝろを答拜といふ一遍しゝ又拜とは答拜といふ
五度の一遍ゝ

(三六) 神前へ白扇をもちゐ。伊豫風土記によりて
いふ所の所は。白扇は病扇。病扇の社白扇をもく
神作とした。伊豫の惟喬の惟を指ゝ。喪中よりふ
もいろの扇よく。喪中よりは紺色黒軸の事。武士ともに
服のうしろの事也

(三七) 大臣不候ぬとしてゝ。一説延喜の比大臣なし。菅
家ばかりに大納言ゝ大臣ともにもとれる
無しゝ。闕とゝまへきこと。不候とあるゝ大臣あまり

故障ありてかくの不候しきのるすく見い職原抄大細云
のごとくよ大臣不候之間奉行與大臣同しきの說ゝ
(其)海童の考。日本記神代巻下巻龍宮の辰海底
龍宮城の中よりかくのごとき對るるるすい常ゝ平ら講
莚しも說文を引くドゝ神りく但は對るの主れ変
彼ゝ按ずるよ。元來伊弉諾尊の神子なるをし
卿說文もあるふし。神書ハ古文記序よりるぞく道
入樂題ゝの故書も廣ぐ記すあるぞ。ぞ人のさ
くとりうんハ。世のあるあるぞ。ぞ增を記して人の
考よまるべし

神代巻上一書曰伊弉諾尊既還乃追悔之曰中略
又沉曜於海底因以生神號曰底津少童命云
新撰姓氏録曰右京神別下天孫部次地祇部立
○安曇宿禰　海神綿積豊玉彦神子穗高見
命之後也
○海犬養　海神綿積命之後也
○凡海連　同神男穗高見命之後也
門書十八攝津國地祇曰
○凡海連　安曇宿禰同祖綿積命六世之孫小拷
梨命之後也

○阿曇大養　海神大和多羅神三世孫穂乙都久命之後也

同書十九河内国地祇曰

○安曇連　綿積神命兒高見命之後也

紀の八巻の巻の口文あり。かゝる孫あれい。紀心紀を以て説くべし。故に抜出せり

(十九)妙の字を附る事。婦人の落髪する妙云々。妙の字紙蒙しるるゆ。たきまゝや。又徳實録の嘉祥二月壬辰追贈流人掘朝臣遠成正五位下の後に其娘落髪して尼となる自名妙仲

(八十)あひしるものと云事。本平記にあひしるものたちなる所と云ハいつるる事うとおもひしよ。或人のいつく千鶏其外雑々の千莫たちなるをいつを。今も馬子の詞にさいつくそ。次にいつ馬子延喜式にんくう

(八十一)神おへ毛氈まくべるる事。法曹類林百十七巻にあり。此書百巻といつよ。二百巻あるへ。一ノ上ノ下。しるゆ二百巻あり。神示神変示の物。假おもしろさ。ものし。毛氈ハ血談といつ。又獣血ともいつ。上代ものくく獣の血くく染るといつ。後く織ものくく代い名を陰る。托之ものハ。杖一百。右の書の巻の部にあり

(八十二) 神社大和錦を用ひ大殿の浮文に地を皆の裏を張る。大和綿 河内綿と分ち。今義解を見るべし。大和の分西まづくと云。生駒山の西を河内。東を大和と云。大和風い赤色河内風い黒色陰陽を分神変よい。大和錦を用る。仏変よい河内錦を用ひ。大和錦よりその外の色あるいあやまりく

(八十三) 神前へ香花を備へ。神代巻一書に伊勢諸尊崩御のごき祭礼へ鐘幢をもつく多る。元の時よい又元を以くまつるとまる。正月一日四方拝 江次第に2事根源なる花を立香を焼ごとを元いに見しく

清浄のごとく。唐土にていい蓮風雅こ小野文左大臣殿の野府記にまる。上代い常ようなる不用

(八十四) 風呂麦とゆるのいい元湯あるよる麦この故ゆきとりく。今の湯ウアーきとりく重言こ。室町家の時分。大湯殿を建く。近習の大名衆一処に入まふまく。銘くへ居沢まて。衣服ともゆるしきたくんをくあるていゆるしさを云ふき。其うへよるをり。後に衣服を着を。色ろ和を包むものをあつく。ゆるーきといのをよ如ゆるり。只うくさ色とゆをしく。ゆるーき色しいいやしき名こ右室町家の

記録の説あり

(八十五) 日本古来暦学くしりぞく。故干支も何も遠よ
こころなし。歴代の学者ありしの変を記せるよ。今の
暦を推して記せる故よ。古来と干支不合なる。理いよ
多氏記録と合ず。役よりて。中根氏作皇和通暦とよ
この二巻下板なる。古来の人い記録よまなく。干支をら
山槐記あり引ける日本の古史をあんとおもふものは。
皇和通暦を以見ては一

南嶺遺稿巻之三終

参考 北條時頼記圖會

平安東籬亭悠翁老編
浪華松川半山畫

全五冊

弘化五年新板

北條氏代執権相模守平時頼朝臣一代
家記を初さまの其人者智徳を修する者能
権とをそて仁政とをし刑を対し者を恵まを
とをて流と和する赤青紙を集後徳の言を学ら
出慶園政を論終を修行者とをを不潔行ら

全著 全畫 北條時頼記圖會後編

全五冊 近刻

青砥藤綱摸凌案 前後十冊

青砥を為最明るの眼代して手定流の一経
ちり仁政と為し和心と正し明徳為若
とまくむる物ぐらちり

紅毛雑話 森島中良著 全五冊

世古い紅毛人の物語ふる学園の内ふる侍
義方い禽獣。草木。魚鳥の名。器物ちい。虫
眼鏡エレキテル水ぐらち流行紅ふの名式とちい
ちら古今未曾有の法書ちり

浪華書肆

河内屋喜兵衛